

上原 美術館 通信

No.
29

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2025年4月11日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



6世紀に日本に伝来した仏教は、都に仏教文化を開花させました。やがて日本各地に寺が建立され、仏像が安置されます。造像を発願したのは主に皇族や貴族、豪族、武士といった支配階級で、古代中世には、彼らの経済力を背景に優れた造形力と技術を持つ作者が活躍、仏教美術の名品が数多く生み出されました。

時が降って室町後期から戦国時代には仏教が地方の民衆の間にも広まり、江戸時代になると、全国津々浦々に寺院やお堂が建立され、おびただしい数の仏像が造られました。この時代には民衆が造像を発願し、彼ら自身が仏像を制作することもあります。こうして江戸時代に造られた仏像の数は、それまでの時代をはるかに凌駕します。数量で見ると、江戸時代は仏像造像の黄金時代といえるでしょう。

江戸時代の伊豆の人たちは、江戸に工房を構える仏師に造像を依頼、あるいは彼らが制作した仏像を購入して、寺院やお堂に迎えることが多かったようです。その一方で、伊豆各地を巡ると、伊豆に生きた作者によると考えられる仏像に出会います。このような仏像神像は、素朴で一見稚拙にすら見える造形ながら、ひたむきな信仰を写したような魅力を宿しています。

伊豆半島南端、南伊豆町石廊崎の正眼寺般若堂に伝えられた茶枳尼天像(表紙)はいわゆるお稲荷さんの像。狐に乗る茶枳尼天と狐の表情は朗らかで、狐の後ろ足が高く跳ね上がるさまはなんとも愉快です。



薬師如来像
江戸時代
南伊豆町・中木薬師堂



十一面観音像
江戸時代
伊東市・龍溪院



観音菩薩像
江戸時代
下田市・楞沢寺



地藏菩薩像
江戸時代
下田市須原地区



韋駄天像
江戸時代
三島市・長福寺



閻魔王像 明治4(1871)年 伊豆の国市御門地区

伊豆北部、伊豆の国市御門地区に伝えられた閻魔像は怖さよりも親しみを感じさせる像。底面には「仏衰明治四」の墨書があり、日本中で廃仏毀釈の嵐が吹き荒れていた明治4(1871)年に制作された像であることが分かります。仏教受難の時代に信仰を守った先人の思いを伝える貴重な文化財です。

円空や木喰といった著名な作者の仏像を例外として、江戸時代以降の仏像は従来、ほとんど注目されることがありませんでしたが、近年、素朴で健康的、親しみのある造形が注目されています。本展は、従来脇役であった、そのような仏像が主役。伊豆全域から厳選して展示いたします。是非ご観覧ください。(田島)

今では巨匠と呼ばれる画家たちにも、そのはじまりがあります。若く名もなき画家はさまざまな人や芸術と出会い、心を揺さぶられ、そして自らの表現の道を歩みはじめます。本展では画家たちの若き感性が溢れる初期作品をご紹介します、その芸術の魅力と本質に迫ります。

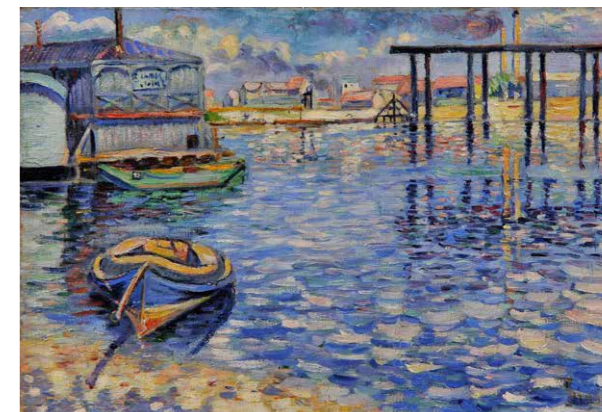


パブロ・ピカソ《科学と慈愛》1896年
© 2025 - Succession Pablo Picasso - BCF (JAPAN)

《科学と慈愛》はピカソわずか15歳の作品です。スペインのマラガに生まれたピカソは、幼少の頃より美術教師の父に絵の手ほどきを受け、15歳で官展のための大作準備を重ねます。その最終準備作がこの油彩画です。人体のヴォリュームを的確にとらえた素早い筆致には、若きピカソの卓越した技量を見ることができます。

主題や構図にも熟考した様子がかがえます。薄暗い部屋に横たわる病人。その傍らには椅子に座る医師(ピカソの父がモデルを務めています)が時計を見ながら脈を取り、一方で幼児を抱く修道女がグラスの水を差し出します。科学を象徴する医師はただ脈を取ることにしかできませんが、慈しみ溢れる修道女は一杯の水を通じて病人の心を癒すかのようです。本作では宗教的な「慈愛」というテーマが対角線上に明暗を分割した構図によってドラマチックに演出されています。ピカソはこの絵を縦2メートルの大作に仕上げ、マドリードの官展で佳作、マラガの展覧会で金賞を受賞し、画家としての本格的な人生がはじまります。

《アニエール、洗濯船》はシニャック18歳の作品です。自身が後年にまとめた作品帖には第1号の番号が振られており、シニャックにとって重要なはじまりの作品であったことが分かります。シニャックは16歳の頃、モネに憧れて画家を志しました。パリの対岸アニエールはシニャックが暮ら



ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》1882年

した場所ですが、セーヌ川を大きく取った構図や、筆触分割によるきらめく水面、川に浮かぶ船という画題はモネの絵画を想起させます。そうした中でもピンクやエメラルドグリーンなど、モネがあまり使わなかった鮮やかな色彩が置かれています。後に理論的な点描主義に進むシニャックですが、本作には理論的な描法にまだ至っていない、若き画家の瑞々しい感性が溢れています。

そのほか、駆け出しのゴッホが憧れのミレーの小さな版画を懸命に模写した《鎌で刈る人(ミレーによる)》、株式仲買人の仕事をしていたゴーギャンが日曜画家として描いた最初期の油彩画《森の中、サン=クルー》、自らの芸術を模索する若き梅原龍三郎が師ルノワールに見せ助言を受けた《モレー風景》、西洋美術研究のため大学院を中退してスペインに渡った須田国太郎がその地の風景を描いた《山の斜面》など、画家たちの初期作品をご紹介します。

上原コレクションには、画家たちのはじまりの作品が多くあります。そこには画家の人間性を見つめるコレクターの小さくやさしい「まなざし」にあふれています。画家たちの初期作品を通じて、上原コレクションの魅力をどうぞお楽しみください。(土森)



須田国太郎《山の斜面》1920(大正9)年

昨年度、静岡県では文化財を3Dデータ化するプロジェクトがスタートしました。本プロジェクトは単にデータ収集にとどまらず、データをHP上で公開し、広くその活用を企図する点で全国に先駆けた画期的なものです。

昨年度は静岡県内にある国・県指定文化財に指定された仏像のなかから、32点を選んで3Dデータ化を行いました。静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課の田村隆太郎主幹の指揮の下、株式会社サビアが3D用に撮影。撮影にあたっては貴重な仏像を動かさねばなりませんし、限られた条件の中で仏像のどの部分を撮影すべきかを検討する必要があります。そこで、静岡県文化財保護審議委員でもある上原美術館の田島が技術指導を行いました。なお、県西部の仏像に関しては、この地域の仏像に詳しい浜松市美術館の島口直学学芸員の協力を得ました。

9月17日、気温38℃の猛暑の中、静岡市葵区、建徳寺で静岡県文化財課の鈴木安由美課長が報道公開。そのまま作業に入り、2体の不動明王像(県指定)を撮影。翌日は同じ葵区の坂ノ上薬師堂で7体の平安仏(県指定)の撮影を行いました。

翌月は伊豆に場所を移し、10月15日にかんなみ仏の里美術館で美慶作の阿弥陀三尊像(国重文)など10体を撮影。翌16日には河津平安の仏像展示館で南



報道発表会(静岡市・建徳寺)



静岡市での体験会
トークイベントの
登壇者
(静岡市歴史博物館)

禅寺伝来諸像(国重文)の中から5体、17日は上原美術館で、当館が保管している松崎町吉田寺の阿弥陀三尊像と毘沙門天像(県指定)の撮影を行いました。

最後は静岡県西部。寒い雨が降る日、10月23日に浜松市の摩訶耶寺で平安の不動明王像(国重文)と阿弥陀如来像(県指定)を、24日には湖西市の応賀寺で平安の阿弥陀如来像、鎌倉時代の毘沙門天像(県指定)と造像願文の撮影を行いました。

撮影した3Dデータは今年1月から、静岡県HP「LEGA-SHIZU」(レガシズで検索)内「LEGA-SHIZU×3D」のページで公開中。いつでもご覧いただけます。

さらに今年2月2日に静岡県中部の静岡市歴史博物館、2月24日に西部の浜松市美術館、3月2日、東部のかんなみ仏の里美術館で3Dデータ体験会を開催。それぞれの会場では10時からと13



撮影(静岡市・坂ノ上薬師堂)



浜松市での体験会
(浜松市美術館)



静岡市での体験会(静岡市歴史博物館)

時からの2回、トークイベントも行い、田島と島口直弥氏が3Dデータで見る仏像の見どころや魅力を解説。静岡会場では仏像好きアナウンサーとして活躍中の久保沙里菜氏も特別出演しました。トークイベントは募集制で、中部と西部は各回50名、東部は各回25名を募集しましたが、いずれの回も満員御礼の大盛況でした。静岡県では今後も文化財の3Dデータ化を進める予定で、当館も引き続き協力します。



函南町での体験会(かんなみ仏の里美術館)

上原コレクションの特徴のひとつに、画家の初期作品が多いことが挙げられます。今回取り上げるポール・ゴーギャン《森の中、サン=クルー》もその1点です。

ゴーギャンは二月革命が起こった1848年にフランス・パリで生まれます。父は共和主義者のジャーナリスト、母は女性解放の先駆的運動家のフローラ・トリスタンの娘でした。そのため、ゴーギャンが1歳の頃にクーデターによる迫害を危惧した両親は、一家で母の縁故を頼り、ペルーに移住します。幼少期をペルーで過ごしたのち、フランスへ戻ったゴーギャンは、17歳で商船の見習い水夫となり、リオデジャネイロなど南米を航海。1868年からはフランス海軍に入り、世界中の海を巡ります。1871年、23歳のときに徴兵から解かれると、後見人である資産家ギュスターヴ・アローザの紹介により、パリのベルタン商会に株式仲買人として就職します。この頃から絵画への関心を深め、仕事の傍ら作品収集や絵画の制作をはじめます。

《森の中、サン=クルー》は、絵筆を取り始めたばかりの25歳のゴーギャンが描いた最初期の風景画です。この頃、ゴーギャンはアローザ家の近くに住んでおり、休日になるとアローザ家と共に彼らの別荘があったサン=クルーをよく訪れました。夏には彼らと森の中でピクニックをして過ごすこともあり、本作は、その一場面をとらえたものでしょう。茂った樹々の葉の重なりによって光を遮られた森の中で女性たちがくつろぐ情景は、落ち着いた色彩と相まって郊外で過ごすおだやかな休日のようなすがすがげさがあります。

この作品は、ゴーギャンがデンマー



ポール・ゴーギャン《森の中、サン=クルー》1873年

ク人のメットと結婚した年に描かれました。5人の子供に恵まれ、裕福な家庭生活を送っていたゴーギャンは、印象派のカミーユ・ピサロとの交流や印象派展への参加を重ねるうちに、絵画への情熱を高めていきます。1882年に起きた金融恐慌を機に、金融の仕事に不安を持った彼は職を辞し、ついには画家としての道を歩む決心をします。しかし、安定した生活はやがて困窮し、1885年、ゴーギャンは家族とともにメットの実家のあるコペンハーゲンに移り住みます。しかし半年ほどでコペンハーゲンを離れ、1887年からは家族とも別れて、ブルターニュ、アルルなど各地を転々とし、1891年に南太平洋の孤島タヒチに赴きます。ここで、ゴーギャンは平面的な構成で、独自の強烈な色彩を放った傑作を困窮と病に苦しみながら描きます。

波乱に満ちたゴーギャンの人生は、常に自らの居場所を求めてさすらい歩いた人生でもありました。そのゴー

ギャンが、54年の生涯で唯一腰を据えて生活していたのが、株式仲買人時代の約10年間でした。その時代に描かれた、彼の絵画のはじまりともいえる《森の中、サン=クルー》。これは、妻メットがゴーギャンと離れた後も手放すことなく、生涯大切に保管していた作品です。メットにとってこの作品には、ゴーギャンとの儂くも幸せな思い出が詰まっていたのでしょう。

メットによって大切に残されたゴーギャンの作品は、『展覧会『であう、はじまる—画家たちの初期作品』に展示されます。ぜひご覧ください。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。
展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催
しています。
開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。
※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

2025年1月30日 南伊豆町立南伊豆東中学校
2月5日 下田市立下田認定こども園

南伊豆東中学校は主に京都・奈良方面の修学旅行の事前学習として、仏像の
見分け方を学芸員が解説しました。下田認定こども園は、絵画と仏像両方を
園児の質問を聞きながら学芸員がお話しました。

出張授業

2024年12月12日 静岡文化芸術大学
2025年1月21日 河津町立河津中学校
1月30日 山崎学園富士見中学校
2月5日 下田市立下田小学校
2月17日・19日 静岡県立稲取高校

静岡文化芸術大学は博物館課程の講座を田島上席学芸員が行いました。
中学生には京都・奈良方面の修学旅行の事前学習として、仏像の見分け方や
現地で出会える仏像についてお話しました。小学生はアートカードを使った
カードゲームをしながら、絵画の鑑賞教育を行いました。高校生の授業は日
本画の画材を用いて実際に絵を描く体験を行いました。

調査活動

2024年12月1日 下市内堂宇調査
2025年2月26日 伊豆の国市寺院調査
3月10日・11日 富士市寺院調査

静岡県内の仏像調査を行いました。下市内の堂宇は、ご開帳にあわせて調査
をさせていただきました。今後も継続して伊豆半島、静岡県内の調査活動
を行ってまいります。

教室作品展

仏像彫刻教室作品展 2025年2月19日～23日
写経教室作品展 3月4日～8日
デッサン・水彩画教室作品展 3月20日～24日
日本画教室作品展 3月27日～31日

会場：各教室ともに上原美術館アトリエ

当館が開催している実技講座の受講生作品展を行いました。毎年1回、1年間
の成果を発表する展示に、今年も受講生の力作が並びました。



ギャラリートーク(上：近代館/下：仏教館)



授業入館 下田認定こども園



出張授業(上：下田小学校/下：稲取高校)



教室作品展 仏像彫刻教室作品展

親子でいろあそび いろの世界をのぞいてみよう
—透明水彩による三原色を用いた色作りの入門編

当館アトリエ 2月8日(土)

講師：小野憲一(現代美術作家/当館デッサン・水彩画講師)

2月8日、当館のデッサン・水彩画教室講師の小野憲一先生をお招きして、
ワークショップ『親子でいろあそび いろの世界をのぞいてみよう—透明水
彩による三原色を用いた色作りの入門編』を開催しました。ワークショップ
には、5歳のこどもからおとなまでの18名、計9組のご家族にご参加いただき
ました。

今回は色作りの入門編として、親子でいろあそびを楽しみながら色の三原
色を学んでいただけるワークショップを開催しました。画材には画用紙と
筆、筆洗バケツ、そしてパレット上に固めた透明水彩絵具と、シンプルな画
材で取り組みます。

ワークショップでは色の三原色(赤・青・黄)のみを使って、さまざまな色を
作り出す体験をしていただきました。3色の水彩絵具に「うすめる」、「まぜ
る」、「にじむ」の技法を掛け合わせることで、わずかに3色しかなかったパレ
ット上には紫や緑、オレンジ色と色とりどりの色彩が生まれました。なかでも
にじみ技法では、たっぷりと水を含ませた筆の動きに合わせて色が混ざり合
うように、参加者からは「わあ！すごい！」と感動の声があがりました。

3色の絵具から、水量や色の組み合わせ方を変えることにより、参加者は
巧みに何色もの色彩を作り出していました。紙の上には、それぞれの個性溢
れる味わい深い世界が広がり、会場中が鮮やかな色彩で彩られました。

今回の親子でいろあそびワークショップは来年度も開催予定ですので、ぜ
ひご参加ください！ (丸山)

アンケートの声

- えのぐをまぜるとこがたのしかった
です。(5歳)
- 三色でもいろんな色が作れてすご
くたのしかったです。いろんな色を組
みあわせてただけでいろいろ名前が
ないいろいろあったので、すご
かったです。(8歳)
- 子どもが製作や絵をかくのが好き
なので、こういう体験をさせてあげ
られてとてもよかったです。今後もこ
うして親子で参加できるものがある
とありがたいです。(保護者)
- 教えていただかないとなかなかで
きないような内容で、親の方が夢中
になってしまいました。(保護者)



三原色を水で薄めながら、色のグラデーションを作りました。



色同士を混ぜることで、さまざまな色彩を作り出します。



筆にたっぷりと水を含ませて色同士を混ぜさせるにじみ技法は、水の量や筆の動かし方によってさまざまに変化します。



講師の小野憲一先生が、ひとりひとりの机をまわりながら、筆の使い方や混色のコツについて丁寧に指導します。



「うすめる」、「まぜる」、「にじむ」の技法を使い、色彩を作ります。



にじんだ色のようなすがすがしい、自分だけのいろの世界を作り出すことができました！

ワークショップ開催情報につきましては、当館ホームページ、公式SNSにて随時お知らせします。

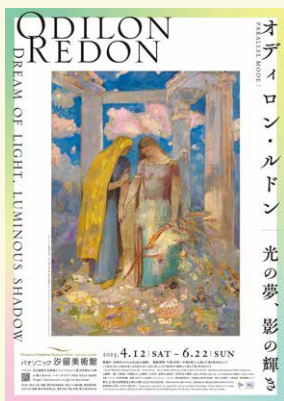
伊豆だより



松崎町大沢の桜並木

年が明けて、2月には美術館周辺で何年ぶりかの雪が降りました。^{あまぎさん}天城山に雪が降ることはあっても、美術館周辺では本当に久々の雪。一瞬ではありましたが、びっくりしました。今年は河津桜の開花が遅く、2月下旬を過ぎてようやく見頃になりました。河津桜の開花から一気に春の気配が広がる伊豆半島は、続いてソメイヨシノや山桜があちこちで見られるようになります。伊東の大室山のさくらの里や、松崎町の^{なかがわ}那賀川沿いの桜並木など、お花見の名所はいくつもあります。松崎町大沢の桜も静かな川沿いに並んでいます。すぐそばに道の駅もありますので、美術館から足を延ばして、のんびりお散歩もおすすめです。(櫻井)

上原コレクションが見られる展覧会



展覧会『PARALLEL MODE: オディロン・ルドン—光の夢、影の輝き』

パナソニック汐留美術館 2025年4月12日(土)～6月22日(日)

画家オディロン・ルドン(1840-1916年)は木炭画や石版画に始まり、パステル画や油彩画と様々な技法を変えながら、イマジネーションの世界を描きました。その夢幻の芸術は、時代や地域を超えて多くの人々を惹きつけ続けています。

本展『PARALLEL MODE: オディロン・ルドン—光の夢、影の輝き』は岐阜県美術館、ひろしま美術館を巡回し、その最後を飾るのがパナソニック汐留美術館となります。岐阜県美術館の所蔵する世界屈指のルドンコレクションを中心に、国内外の名品を加えた約110点の作品により、ルドンの豊富な画業の全容をご覧いただく展覧会です。伝統と革新の狭間で、近代美術の巨匠ルドンが独自の表現を築き上げていく姿が初期から晩年まで紹介されます。

当館からは、パステルのような独特の質感を放つ油彩画《読書の女》(1900年頃)、文学を主題とした晩年の作品《ダンテとベアトリーチェ》(1914年頃)と《ダンテの幻影》(1914年頃)の3点が出品されます。(土屋)



特別展『美はすぐそこに—主情派・鏑木清方』

鎌倉市鏑木清方記念美術館 2025年5月24日(土)～6月29日(日)

日本画家の鏑木清方は、創作活動の円熟期を迎えた昭和10(1935)年に、自らの芸術を「主情派」と総括し、自身の系譜である浮世絵派とは区別しました。生活にゆとりをもって自分の心を見つめることを意識した清方の制作姿勢は、忙しい現代を生きる私たちに多くの気づきを与えてくれます。この特別展では、清方芸術の変遷の中から生まれてきた「主情派」について再考し、暮らしの中に宿る美を見つめ描いた作品を中心に紹介されます。

当館からは^{まつちよさめ}鏑木清方《待乳夜雨》(1920年)、^{もくぼしよさめ}《木母寺夜雨》(1936年)、^{つきじがわ}《築地川》(1941年)、《春雨》(制作年未詳)の4点を出品します。(土屋)

次回休館日は2025年4月14日(月)～4月25日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

表紙写真: 神狐に乗る茶积尼天像(室町末～江戸時代 南伊豆町・正眼寺蔵)。狐ののびやかな造形が魅力です。